私の映画体験

伴淳との一枚の写真

衣斐　弘行　同人誌主宰

コロナ禍の影響下もあり映画館に行くことはなくなった。予定はすべて中止延期でそれ故読書や書斎整理の時間がつくれたし、今迄見たことがなかったＮＨＫＢＳでの映画を見ることができた。チャップリンをはじめ懐かしい映画が幾本か見れたが５月１８日に放映された内田吐夢監督『飢餓海峡』は見てみたい映画のひとつであった。

水上勉の原作は元々「週刊朝日」に昭和３７年１月から連載され１年間の連載後５００枚余が書き足されて翌３８年朝日新聞社から刊行されている。私が読んだのは昭和５５年頃で新潮社文庫版で、その後版を重ね歿後の平成５年には河出書房新社から改訂決定版として上下２冊本が出ている。

映画は原作に割り合い忠実に作られているが処々に内田吐夢監督独特の筋立てや映像効果が活かされている。例えば筋立てでは主演男優三国連太郎演じる犯人樽見京一郎と主演女優左幸子演じる杉戸八重が娼婦宿で過ごす場面では原作にない樽見の足の爪を八重が切る場面がある。樽見はそこで大金を八重にわたして宿から去ったあと、八重がその樽見の親指の爪を愛おしく懐にする。この八重が懐にした樽見の爪が映画の随所に活かされている。映像処理に関しては専門的なことは分からないが解説書によると「内田吐夢の執念は、あえて１６ミリフィルムで撮影し、推理の場面ではネガとポジを二重焼きにするという、特殊な映像処理にも現れている」とあり、それが見るものにリアリティと説得力を与えている。

原作も長編だけに映画も上演時間３時間余であったが全体に緊張感のある展開に退屈しなかったのは男女両主演俳優の演技にくわえ犯人を追う警部補弓阪吉太郎を演じた伴淳三郎の渋い演技力が光った点にある。

私の世代は伴淳(ばんじゅん)と呼ばれたコメディアンとしてしか彼の演技を知らないがこの映画で見せた老練刑事役の巧妙な演技は自然体だけに実に魅力的であった。映画を見終わってから私は昔、中学生の頃伴淳と一緒に撮った写真があったのでは、ということを思い出した。それから書庫を捜し見つかった写真が次頁の１枚である。

忘れていたが写真裏に「昭和３７年秋／於サーキット／伴淳三郎と／映画／チン・ジャラ物語／ロケの時」と記されていた。サーキットの記録によるとこの年の９月に市制２０周年に合わせて我が国初の国際レーシングコース鈴鹿サーキットが開園し、１１月３・４日に第１回日本選手権大会が高松宮夫妻を迎え開催され２８万人もの大観衆が押し寄せている。となると映画ロケはその後のことで写真の服装からして晩秋から初冬といった感じである。伴淳の映画歴を少し調べてみたがどういう訳かこの映画記録が見つからない。私の記憶では名古屋が舞台のパチンコのクギ師の話でその映画ロケではなかったか。中学生の私がエキストラに駆り出されたのは当時寺近くに住んでいて可愛がってもらっていた朝日新聞の中島信吾記者が取材に行くのに誘われたのではと思う。写真も中島氏が多分撮ってくれたものだろう。中島氏はその後本社の文化部長や論説委員を歴任し詩人としても活躍したが先年亡くなり今となっては訊ねることもできない。

鈴鹿サーキットが映画ロケ地としてその後加山雄三の若大将シリーズなど多くつかわれてきたが伴淳主演のこの映画ロケが恐らく最初ではなかったか。しかし、この映画のあと、彼は内田吐夢監督の手厳しい演技指導のもと大作『飢餓海峡』の撮影に入るのである。写真の伴淳のなんとなく迷惑そうな表情は喜劇俳優から性格俳優に立ち向かう気概からなのだろうか、と思いながら半世紀余も前の写真を懐かしく眺めた。

「映画監督 藤田敏八」出版ものがたり

林久登　スタッフ

「アンタ、何か書け！」突然言われる。これが始まりだった。２００６年春、毎日新聞から私の属している〝三重映画フェスティバル〟（以下三重フェスと呼ぶ）に「週一回映画に関する記事を載せてほしい。公序良俗に反しない内容であれば、ノーチェックですべてお任せ」。との寄稿依頼があった。津の主要メンバーだけでは手が回らないので、こちらに御鉢が回ってきたということだ。

それで、たまたま私が四日市出身の映画監督藤田敏八（以下敏八と呼ぶ）の弟と親しいことから、彼に関することを書いたところ、「面白いもっと書いてくれ」ということになり、結局そのシリーズに数回にわたり掲載することになった。で、２年後、その打ち上げ会の席で、当時の三重フェスの会長だった吉村英夫氏から、「君の敏八評は面白かった。何とか本にまとめてはどうか？」という誘いがあった。しかし、当時、私にはそんな大それた気持ちは全くなかった。

それから数年が経ち、リタイヤーして時間を持て余すようになった２００９年頃、市の広報で「四日市文芸賞」（清水信審査委員長 原稿用紙３０枚）というものがあることを知った。評論、エッセイ、小説と幅広いジャンルの文芸を募集している。しかも、第一席には１０万円が出るという。これはおいしいではないか。敏八は地元出身の監督で、文芸賞は市の事業なんだから有利に働くに違いない。小遣も欲しい、ちょっと試してみよう。と吉村氏には内緒で「藤田敏八小伝」として前述の原稿に手を加え出してみた。すると、これがうまく当たって賞金を獲得したのである。

それで、調子に乗って、２０１０年編集プロダクション映芸（以下映芸）が「映画芸術評論賞」（原稿用紙６０枚）を、募集していたので、これにも応募してみた。するとどうだ、最終選考まで残ったものの、赤地偉史という評論家に「常識人が常套句を重ねて書いた非常識人のエピソードで評伝の評がない」と、バッサリ切って捨てられたのだ。私はその見事な評価に思わず笑ってしまった。言い得て妙な表現だったからだ。要するに、一介の化学会社のサラリーマンＯＢにすぎん者が、評論の世界を舐めるなということだ。

当の吉村氏には黙っていたが、四日市の件はやっぱりバレた。市の文芸賞の審査員から漏れたようだ。それからは会うたびに吉村氏に攻められた。「アンタ、書く気あるんやろう。敏八論はまだ誰も手掛けていない。アンタしか知らないことがいっぱいある筈や。それを書け！」と矢継ぎ早に言われる。

氏（これからは師と呼ぶことにする）の説明によると、本にするには原稿用紙５００枚は必要とのこと。今までせいぜい５０枚ぐらいしか書いていない。それを一ケタ多い枚数だからとんでもない量だ。私は迷っていた。評伝の作り方などまったくわからない。師は１０冊以上の書き下ろしの本を出しているプロの作家だ。山田洋次研究の第一人者であり、寅さん映画の評論家として知られている。私がハマっている無頼派の敏八映画とは相いれない世界なんだが、そんな体質の異なるジャンルであっても全然気にしない。むしろ価値観の違う者同士が丁々発止するのが面白いという。師は度量が大きい。そこが人間的魅力でもある。

私がオタオタしている間に、師のペースにはまっていった。そして、それからというもの六十の手習いよろしく、本づくりのイロハから教わる。とにかく私の持っている敏八情報を洗いざらい出し、何度も削ったり、付け加えたりの添削を受ける。こちらが投げ出しそうになっても、師は自分の事のように粘り強く迫って来る。そんなタイプの師は私の長い人生でお目にかかったことがなかった。その情熱に圧倒されながら、次第にエンジンがかかってきて、本気になって取り組むようになる。

師は、「評論は知性、小説は感性だ！アンタは小説が向いているかもしれん」とも言う。でも、私は小説のようなウソ（虚構）の世界を書く気はないし、そんな想像力は持ち合わせていない。あるのは年寄りの妄想だけだ。しからば、思い切りプロの評論家とは違ったエモーショナルな私なりの評伝を書いてやろうと開き直り、知性の固まりのような師との相剋が続く。

そして、苦節一年、いや、メチャクチャ集中した一年、全２００ページ、文章の足らないところは、慶二（敏八の実弟）が好きなように使えと提供してくれた写真で埋め、やっと形が出来て来る。師からも一応合格点をもらった。さて、次に出版をどうするということになる。私は出版の世界など全く知らないし、最悪自費出版でもいいかなと考えていた。が、師の友人が私のゲラを読んで、その友人に

あたる映芸の実質編集長である稲川法人氏に取り次いでくれた。で、映芸より一度原稿を送れとの連絡が入る。不思議なもので、私が映芸に応募して３年が経ち、奇しくもその映芸に再び巡り合うことになる。

当時の映芸評論賞の最終選考委員には編集長の荒井晴彦氏も加わっていた。彼が生前の敏八と、監督と脚本家の関係以上に、気の置けない飲み仲間であったことは勿論知っていた。そんな因縁も働いて取り上げてくれたのだろう。それからは、トントン拍子で話が進み、２０１２年９月号の映芸の増刊号として出版の運びとなる。しかも、敏八命日の８月２９日にオーディトリアム渋谷の上映会で本の販売と冒頭の挨拶までさせてもらうことになる。友人いわく、まさに古希直前になって、私は狂い咲いたのである。

出版にあたって稲川氏には大変お世話になった。編集や校正でのやり取りはあったが、本文に関する指摘は一点もなかった。私のようなにわか作家に対しても、書き手を尊重する姿勢に頭が下がった。

だが、一つだけ問題が出て来た。それは梶芽衣子主演の『修羅雪姫』だった。敏八にしては、めずらしいＢ級活劇時代劇だ。稲川氏によると、写真掲載の承諾を得る為、梶プロダクションに打診したところ、思いがけず「一切、本にしてもらっては困る」との返事が返ってきたと言う。写真はおろか、梶にかかわる記事は全てダメというのだ。この本の梶については、元々贔屓にしているので悪くは書いていない。むしろ評価しているのに納得がいかない。しかし、氏の説明では先方は頑なでどうしようもないという。

もともと、本の製作編集は稲川氏に全面的にお任せしているので、氏の判断に任せる。そして結局、『修羅雪姫』の稿はバッサリ削除ということになる。正直、私は敏八の一連の映画作品の中で、ちょっと異色のこのジャンルを入れたかったが、思うようにいかなかった。梶プロの女社長は知る人ぞ知る強面という噂は聞いていたが、映芸は敵も多い、梶プロとの間に何らかの確執があったのか、今もって真相はわからない。

それでこの機会にその〝オクラ入り〟していた『修羅雪姫』評に光を当てたく、ここに掲載させていただくことにする。なお、このシリーズの脚本は敏八と同じ四日市出身の長田紀生である。

※三重映画フェスティバル
２００３年三重県出身の小津安二郎生誕１００年を記念し、その功績を顕彰すべく立ち上げた津を中心にした映画愛好家のグループ名

エキサイティングなB級映画への挑戦

敏八初めての活劇時代劇への挑戦。漫画の映画化はビジュアルな世界なのでやりやすいのだろうか？赤い色の好きな敏八は、鮮血の噴出す場面や、腕がちぎれ飛んでいくような派手な殺陣シーンなど、やりたい放題だ。ただ、意識してかそうでないか分からないが、映像での血の色はバーミリオンなので戯画的、さほど不快感はない。それにしても日常のリアリズムとは程遠いが、実に楽しい。三池崇史や園子温も真っ青だろう。

元々彼の映像センスは定評があったが、この修羅雪姫シリーズでその力量が遺憾なく発揮されている。殺陣シーンのダイナミックなカメラワーク、海辺のリリックな情景、雪景色の中をさまよう妖艶な白装束姿、絵巻物を見ているようで素晴らしい映像だ。

『修羅雪姫』

1973年　東映　97分

監督　藤田敏八　脚本　長田紀生

原作　小池一夫、上村一夫　撮影　田村正毅

出演　梶芽衣子、西村晃、大門正明、赤座美代子

中田喜子

怨みの河に身をゆだね、女はとうに棄てました

父（大門正明）を撲殺され、母（赤座美代子）を輪姦された怨念を晴らす為、獄中で生まれた雪（梶芽衣子）は同じ監獄にいた女に引取られ元旗本の和尚のもとで、剣術の修行を積む。やがて成人し和尚（西村晃）のもとを離れた雪は、全国に連絡網を持つ乞食軍団を利用して仇敵４人を探し出し次々と殺していく。

殺陣のたびに鮮血が音を立て噴き出し、腕が飛び胴がちぎれる。ラストには男２人が串刺しになる。何とも過激で荒唐無稽のショットが続く。が、結構面白い。幼少時から徹底的に鍛えられ、洗脳され、復讐だけが彼女に与えられた使命と信じる雪。そんなアナーキストを梶が好演。オトコマエの彼女でなければこなせなかっただろう。成人した雪が着物姿で和傘の仕込み杖を持って歩く姿は絵的に素晴らしい。また、その殺陣のしなやかさは絵巻物を見ているようだ。終盤、仇敵の娘小笛（中田喜子）に刺された梶が、

血しぶきを浴びた白装束で、雪の舞い降りる路地をさまよう姿は、この世のものとは思えぬくらい妖艶な美しさだ。敏八の映像センスは素晴らしい。

しかし、映画を観終わってみると、彼女に感情移入が出来ていないのに気づく。雪の復讐のみに生きた人生っていったい何だったんだろうと思う。考えてみると、雪にとって、直接仇敵への恨みなどない。母から託された復讐にひたすら従う物語なのだ。物心ついた頃にはすでに両親はいない。だから二人がいかに残虐な仕打ちで死んでいったかは、直接見ているわけではない。彼女は自分の意志に関係なく、引かれたレールに乗って夜叉になっていくのだ。いかにも単調で、操り人形のようなのだ。もうひとひねり欲しいところ。

例えば、理不尽な生い立ちに揺れる心の中を覗かせてもいいと思うのだ。しかし、敏八―長田のハードボイルドコンビにそんな話は無縁だろう。さしずめ、ラスト仇敵の娘に、故意に刺されることでオトシマエをつけたということだろう。

ハリウッドのクエンティン・タランティーノ監督がこの映画にほれ込み、『キル・ビル１』（２００３年）の中に取込んでいる。タランティーノはパロディ、オマージュ映画が得意で、新しいアメリカ映画の旗手と言われている。日本映画に造詣があり、深作欣二監督らの崇拝者で、知る人ぞ知る梶芽衣子の大ファンでもある。０４年カンヌ映画祭の審査委員長を務めた。しかし、彼がいくら名場面をパクっても、原作には遠く及ばない。『キル・ビル１』の中で、料理屋の館内での激しいバトルの後、ユマ・サーマンがルーシー・リューを追って障子をバーッと開けると中庭は一面の雪景色。ハッと目を見張る（これは鈴木清順の『関東無宿』のパクリ）。そこで白い着物姿のルーシーとトレーニングウェアーのようなものを着たユマとの一騎打ちになるのだが、背景の音楽がフラメンコギターでうるさく、なんとも、ちぐはぐな殺陣シーンで日本的美意識とはだいぶずれている。そして、あきれたのはエンディングクレジットで『女囚さそり』（１９７２年）の主題歌〝怨み節〟が日本語で流れることだ。これには唖然とさせられた。彼らは中途半端なパクリはやらない堂々とやる。しかし、日本の伝統文化というか、日本人のメンタリティとは程遠い。

梶は既に『女囚さそり』シリーズで、黒ずくめの女アウ

トローの型を作ったが、この映画でまた、新しい着物姿のアウトローを造形している。その仕込み杖を手に白装束の修羅雪姫は、しなやかな立ち居振る舞いの中に、女を封印してはいるけれど、着物の下には豊かな肉体と情念が息づいているのがわかる。だからこそ、キリッとした立ち姿が絵になるのだ。敏八の演出力に負うところも大きい。私は以前ある雑誌で彼女のヌード写真を見たことがあるが、均整のとれた見事な肉体をしていた。振り返ってみると、野良猫ロックシリーズに始まって、修羅雪姫に至るまで、前期の敏八作品に欠かせない女優だったことになる。敏八全作品の中で主役級の女優としては、最も多い。

『修羅雪姫・怨み恋歌』

１９７４年　東映　８９分

監督　藤田敏八　脚本　長田紀生、大原清秀

原作　小池一夫、上村一夫　撮影　鈴木達夫

出演　梶芽衣子、伊丹十三、原田芳雄

吉行和子、岸田森

修羅雪姫シリーズの第２弾で、長田紀生に大原清秀が加わったシナリオ。前作の『修羅雪姫』は、単なる復讐劇に終わり平板だったが、今回は権力闘争や、兄弟の確執が織り込まれ、よりストーリーが立体的になっている。

徳永乱水（伊丹十三）というアナーキスト（幸徳秋水が下敷きになっている）は、暴露すれば当時の政府が転覆しかねない極秘書類を持っているため、彼を抹殺せんとする秘密警察に追われている。その抗争に女中として雇われている雪（梶芽衣子）が巻き込まれる。乱水兄には弟周介（原田芳雄）がいるが、２人の間には一人の女あや（吉行和子）をめぐって確執があり兄弟関係は断絶している…。

冒頭、荒れ果てた墓地から父母の墓参りを済ませた雪が出てくるところを数人の刺客が取り囲む。墓地は高台にあり、雪は小道を下りながら向ってくる敵を、仕込み杖で次から次へとなぎ倒す。このワンカットの長廻しのショットは小気味いい。３７人の殺人を犯したという雪、荒唐無稽の物語だが、大の男たちをバッタバッタと斬り捨てるしなやかな着物姿にうっとり見とれる。それほど殺陣は流れるように美しい。

前作は白装束だったが、今回は女中という役柄からか黒が基調だ。梶は怨恨を背負った役がよく似合う。端整な顔にキリッと締まった立ち姿は素晴らしい。今回は、梶、伊丹、それに弟役の原田、その弟を裏切る妻吉行ら錚々たる役者が顔を揃えている。

その役者たちに目を移してみよう。女房を寝取られた原田は、血縁関係を断ち切って貧民窟に住み、いかがわしい医者をしている。セリフはどうやら当意即妙の原田流で、こうしたやさぐれ者をやらせれば、彼の右に出る者はいない。

その兄の伊丹は大逆事件で処刑された幸徳秋水を連想させるしたたかなアナーキスト役だ。女好きなところも随所に見せ、吉行との濡れ場も見せるが、女中という名目で刺客として入った梶の尻を触るショットなど面白い。劇中一

度も表情を崩していない彼女が唯一含み笑いを洩らし、女の姿を見せるホッとする場面だ。

敏八も伊丹と同じ監督と役者の二刀流だが、こと役者に関しては、伊丹に遠く及ばない。その伊丹は監督として多くの作品を残しながら、自死（１９９７年）している。個性派役者としても存在感がありまだまだやって欲しかった。あの、独り言のような、無言歌を口ずさみながらの乱水役はそんじょそこらの役者には出来ない。

出兵中の夫を裏切り、その兄と一緒になる吉行もいい。元夫への罪の意識と、逃れられなくなった兄乱水との肉体関係に悩む熟女を全身で好演している。たぶん弟はセックスが淡白で、兄はねちっこいのだろう。外見が野性的な男は意外に女体に執着がない。だから寝取られるのだ。そういう意味からも、このキャスティングは絶妙。

終盤、護国英雄の参拝に集まってくる悪徳政治家や秘密警察の面々を雪と周介が待ち受けている。この２人がパンアップしたカメラに階段の上から姿を現すショットは鬼気せまるものがある。ペストにかかっている周介は激しい闘いで力尽き、彼自身に頼まれて雪がとどめを刺すシーンは白眉。文字通り修羅場を潜ってきた雪の目に涙が浮かび、周介への想いが伝わってくる。

敏八の映像センスが卓越している。もちろん鈴木達夫のカメラテクニックがあってのことだが、特に海が出てくると彼の独壇場で乱水とあやを小船に乗せて荼毘に付すシーンや、秘密警察に追われた雪が、海辺で繰り広げる殺陣シーン等、随所に素晴らしいショットを見せてくれる。

前作は修羅雪姫の単純な復讐劇に終わっているが、今回の『怨み恋歌』は違う。雪を取り巻く３人の間にそれぞれの確執があり人間ドラマがある。それに国家権力が襲いかかって来るといった二重構造になっている。つまり、最早、修羅雪姫が主役の作品ではなくなり、前述したように彼女を取り巻く役者たちががっちりスクラムを組み、権力に向って行く一級の娯楽作品に仕上がっている。

初めてのエキストラ体験だぁ

太田　義幸
通りすがりの映画好き

梅沢富美男が歌っている。「恋はいつでも初舞台」と。

という訳で、今回は初めてのエキストラ体験記である。ひょんなことからエキストラ体験をすることとなった。時は令和元年7月、作品は羽住英一郎監督の「太陽は動かない」。出演は藤原竜也、竹内涼真、安藤政信など。

場所は四日市の日永にある中央緑地。当時、現場は新しい体育館を建設中であり、その建設現場を「東京の国際都市博覧会会場の建設現場」に見立てての撮影である。その会場が爆破テロにあい、建設作業員などが負傷するシーンの撮影である。中央緑地に到着すると既に2、30人のエキストラ出演の人たちが集まっていて受付をしていた。そこである程度の役柄に振り分けされた。

その役柄に応じて衣装や小物が手渡された。私は一緒に行った後輩とともに救急隊員の役である。救急隊員の制服やヘルメットを渡された。靴も何足も用意されていた。松竹衣装という業者が全て準備しているようだが、撮影シーンにあわせて様々な衣装を用意されている様子もなかなかのものであった。爆破テロに遭遇した作業員役の人たちは、被害にあった後の様子なので穴が開いたり焦げていたりするボロボロの衣装を着せられていた。私たち救急隊員はメイクの必要はないが、作業員役の人たちはケガのメイクをしてもらっていた。それが結構生々しいのである。メイクによって次々とけが人が増えていく。明らかに重傷者もいるぞ。逆にマスコミ関係の役柄の人たちはシュッとしている。小道具としてメモ帳を渡された人もいたので見させてもらったら、「容疑者は○○」とか書いてあった。以前のロケの時にエキストラがメモったものだろう。何やら楽しい。

着替えもメイクも終わって撮影現場の近くの控室に。そこでまずは弁当をいただきました。いやぁこれがロケ弁ってやつかぁ。あれれ、スタッフの弁当の方が高級そうだぞ。まあ、そんなこともありますわなぁ。この日は暑すぎる天気ではなかったけど、そこそこ汗ばむ陽気であった。さすが熱中症対策はとられているようで、控室のお茶は飲み放題となっていた。映画はウエイティングビジネスと言われるように、待つことばかりが多いようで、その控室で待つことしばし。

やっと、撮影の声がかかる。救急隊員役は4人。私と後輩と、あとの2人は本当の救急隊員さんであった。なので

撮影スタッフも現場ではどんな処置をしますかとかいろいろと聞いている。シーンは爆破テロが起こり、救急隊が駆け付けて手当てするシーンである。私はノホホンとストレッチャーで負傷者を運ぶ役と思っていたらモノホンの救急隊員と一緒に負傷者を担架で運ぶ役を仰せつかってしまった。皆がそれぞれの位置についてリハーサル開始だ。

「さん、にい、いち。スタート！」。結構な体重の負傷者を担架で運ぶ。担架で横になっている人は頭側より足側の方が軽いので、当然私は足側である。しかし、通常担架というものは足側を進行方向にするものらしく、そうなると足側を持っている私は後ろ向きに進むことになるのだ。負傷者を運ぶので、チンタラ歩いていくわけにはいかない。「負傷者、通りまーす！」と大声をあげながら後ろ向きに走ることになる。最近は全く運動をしていない。筋肉も使っていない。10m走っただけでヒザが痛くなる今日この頃である。モノホンの救急隊員には余裕だろうが私にはちょいと辛い役目である。で、リハーサルというものは何回も繰り返すものである。「あかん。腕が重くなってきた。足ももつれそうだ。」カメラは結構近くで撮影している。私が映っている可能性もそこそこある。そんなところで足をもつれさせて担架ごとこけてしまったら「カットォー！」と言われるのは目に見えている。私が原因でカットはないやろ。「はい、本番いきます」の声。頑張れ、俺！。結果、何とか頑張ったよ。無事、そのシーンの撮影は終了。良かった、良かった。

カットがかかる都度にメイク担当者が負傷者のメイクをしにきていた。なので、ドンドン重傷者になっていき、トリアージならもうとっくに黒色じゃんって感じになっていた。

救急隊員の出番が終わるとスタッフから、「まだ時間ありますか、他の役もできますか」と聞かれた。うん、折角だから、その話にのりましょう。次は警備員の役である。作業着に蛍光ベスト、ヘルメットとピカ棒がグッズだぁ。名札も渡された。今から私はガード総合警備保障(株)の田山和巳である。松竹衣装は何でも持っているなあ。

着替えはしたが、しばらくは控室で待機。そこには負傷者役のエキストラはいなかったが、マスコミ役の女性のエキストラが数人待機していた。すると、その控室の前を出演者の竹内涼真が通っていった。女性陣は突然の嬌声だぁ。女性ってああいう声を出してしまうもんなんだ。おそらく男は好きなアイドルが現れても大声を発するってことはあまりないと思うけど。

次の撮影は、爆破現場に車が出入りし、その都度マスコミが群がるシーンである。警備員の田山和巳こと私は、カメラからはるか離れたところで警備員交代の場面にいそしんだ。で、その後の撮影は、田山和巳の交代前のシーンなので私の出番はもうないのである。そんなことなのでカメラに映らない場所で撮影を見学していた。

手持ち無沙汰で撮影を見守っていたら、向こうにいた人物がその人の控室に行こうとしているのか私にどんどん近づいてきた。うん、藤原竜也である。みょうに背筋がピンとしている。あっ意外と背が高いんだ。私の後ろ１ｍをうやうやしく通っていった。ああいう時って握手とか求める雰囲気ではないんだなぁ。向こうからも求めてこないし。ただ、あの一瞬、藤原竜也に世界で一番近い人物は田山和巳こと私であったのだぁ。おそらく藤原竜也もそう思ったに違いない。

その後もノホホンと撮影を見ていたら、さらに来ましたよ。もう一人の出演者、竹内涼真が。随分しっかりしたガタイだなぁ。控室から移動しようと思うとどうしても私たちがいる通路を通らざるをえないのですね。なので繰り返します。ある刹那、世界中で誰よりも竹内涼真に近い人物は田山和巳こと私であった。それは竹内涼真がどれだけ否定しようとも否定しきれない事実であり真実なのである。その事実が彼にとって全く持って何の意味も持たないだろうが、田山和巳こと私にとっては、シネマ游人に書くネタができたということで非常に大きな意味を持つものである。人生においても同様であり、一方にとっては意識の片隅にも全く残らないことがらでも、他方にとっては忘れることのない大きなイベントだったりするものである。うん、人生は面白い。

この「太陽は動かない」は、映画として公開するが、ＷＯＷＯＷのオリジナルドラマとしても別ストーリーで製作されるようだ。令和２年５月中旬から映画公開の予定だったが、世界中で感染拡大が起こった新型コロナウイルス感染症により、公開が令和３年の春まで延期されてしまった。で、元々ＷＯＷＯＷでは映画と別ストーリーで５月下旬から６回シリーズで放映されることとなっていた。で、ホームページなどを見てみると、どうも私がエキストラしたのは映画版ではなくてＷＯＷＯＷ版の「太陽は動かない　ＴＨＥ　ＥＣＬＩＰＳＥ」であるようだ。

そして、映画公開の延期の件があってか、第１話だけユーチューブで５月中旬から無料配信をするとな。まずはパソコンの小さい画面ながら無料配信とやらを見てやろうで

はないか。うむ、冒頭のシーンから、まさしく国際都市博覧会会場の爆破後のシーンではないか。こ、これは映るかもしれない。広がる期待である。画面の中で女性アナウンサーが爆発のニュースを伝えている。放映が始まって約２分後である。何ともヨタヨタと負傷者を担架で運んでいる救急隊員がいるではないか。まさにまさに私であった。ヘルメットにマスクをしているので顔は全く識別できないが、演じた私が言うのだから間違いない。全くもって私であると興奮していたら１秒ほどでシーンが切り替わった。

たかが１秒、されど１秒である。アンソニー・ホプキンスは上映時間１１８分の「羊たちの沈黙」のなかで、出演時間はわずかに15分ほどであったがアカデミー助演男優賞を手にしたではないか。なので１秒の出演の私がオスカーを絶対にゲットできないとは言い切れないのであるぅ。いやぁ、言い切れるなぁ。

パソコンの画面は小さい。ＷＯＷＯＷでの放映は５月25日。当然に録画だ。もちろんスロー再生で見るよ。やっぱりテレビ画面はパソコンよりも大きくはっきり映っちゃう。照れるなあ。これが映画館のスクリーンなら更に感激しただろうに。ちょっと残念。

一緒に行った後輩も救急隊員役であったが、どうも画面には映らなかったようだ。当日は何十人ものエキストラが出演し、着替えもし、メイクもし、相当の手間暇がかかっているが、画面に映って本人と分かる場合はごくわずかなんだろうな。そもそも、そのシーンが全てカットされる場合もあるのだろう。そんななかで顔は全く認識できないものの映っていると自分で認識できたことは本当に嬉しいものであった。これをきっかけにプロダクションからお声がかかることを密かに待っている次第である。